

# 島津義弘の旅

——『島津義弘海行記』——

白井忠功

## 1

島津義弘（天文四年一五三五—元和五年一六一九）は、島津家十五代貴久の次男として生まれた。初名忠平・元服して又四郎と称した。貴久には長男義久（十六代）・三男歳久・四男家久があり、兄弟四人は同心一体となり島津家三州統一、ひいては九州の全土を制覇した武将たちであった。彼等<sup>①</sup>はいずれも名将・勇将・知将の誉れ高い人たちであった。島津には暗君なしといわれているが、彼等こそ代表的な名君であった。父貴久は「島津家中興の祖」と仰がれ、その父忠良（日新斎）、長子義久、次子義弘に至る四代を戦国島津と称していた。武勇・智略・加えて慈悲の心も深い忠良は、後世、薩摩藩至高の教典とされた「いろは歌」の作者であり、孫義久・義弘について「義久は三州（薩摩・大隅・日向）の総大将たる材徳自ら備わり、義弘は勇武英略をもつて傑出す」（傍点・私・以下同じ）と各人の長所をたたえている。義弘は、慶長の役の折り、泗川の戦いで、明の大軍を撃破し、日本軍の帰国を容易にし、また、

関ヶ原の合戦では、ひしめき追いつがる東軍を、千五百余名が八十余名になるまで死闘した烏頭坂の退却ぶりにより「島津の退き口」と敵にまで賞賛された島津兵庫頭義弘（剃髪して惟新斎）である。

いま、義弘の全貌を記述するところではない。天正十五年（一五八七）豊臣秀吉の九州平定により彼に大隅一国が與えられた。翌十六年五月、秀吉の寛大な処置に対するお礼言上のため上坂した後、その往路と在坂中の動静とを子息又八郎（のちの十八代家久）に宛てた書翰である『島津義弘書状』（仮称『島津義弘海行記』）を読み、私見を記述しようと思うのである。現在披見する書状は、前半部紀行の記、後半部追書である在坂の記から成っているのである。はじめに上坂の旅の記から読み進めてみたい。

## 2

去月廿六日其元罷立、打続風雨に此方彼方にやすらひ、漸晦日佐土原まで越着。

と旅立ちの記述がみえる。義弘は永禄七年（一五六四）日向国真幸院を領有し、飯野城に移って以来、天正十七年（一五八九）まで二十五年間、当城にあった。隣接の加久藤城に夫人実窓を置いたという。

義弘は、天正十六年（一五八八）五月二十六日、飯野城（宮崎県えびの市）を出発したのである。「去月廿六日其元罷立」である。それより先、天正十四年（一五八六）八月十七日、忠平を改めて義珍と称した。翌十五年四月十七日、義久・家久とともに根白坂に宮部継潤の軍を攻めて敗れ、五月一日真幸に帰り、五月十九日、日向野尻において豊臣秀吉に見え、五月二十五日、秀吉、義珍に大隅国を安堵する。二十六日、薩摩国鶴田において秀吉に見える。八月、

義珍を改めて義弘と称する等々、上坂までの経緯がうかがえるのである。出立までは、飯野の白鳥権現・住吉崎一ノ宮・飯野狗留孫権現・光明院への無事祈願のことがみえるのである。

飯野から佐土原（宮崎県宮崎郡佐土原町）まで五日を要した。文禄三年（一五九四）新納忠元（『新納忠元上洛日記』<sup>(5)</sup>）が主君義久の京都上洛に随伴した際、薩摩大口城（鹿児島県薩摩大口市）より飯野「飯野へまかりとまり」、野尻（宮崎県西諸県郡野尻町）・綾（宮崎県東諸県郡綾町）でそれぞれ一泊して佐土原へ着いたとある。薩摩大口より四日の旅程であったというのである。義弘は飯野より佐土原まで「打続風雨」に悩まされ諸処で風雨を避け、休息しながら「漸晦日」に到着したというのであった。佐土原滞在三日後「<sup>(6)</sup>今月三日（閏五月三日）從徳之口出船」した。日向灘は「折しも神なりさはき雨風うちしきりたる」不安の船旅となったのである。その間雨足も治まり、追い風にのって「酉之刻にはそ嶋へ至りぬ」と無事細島（宮崎県日向市）に着いたと記している。義元らは、地元の人たちの饗応を受けたという。悪天候のため「一日逗留」したのであった。

五日寅之刻出船、豊後佐伯之内蒲江と云る所へ漕入けるに、おりしも渚ちかく、野狐さき立て旅宿の後の山へ入、其夜こゑ枕近く、目さましかちに明し侍し、彼在所はむかし社軒をならへし家居もありけれ、<sup>(大友、島津両氏)</sup>豊薩干戈以来となりさへよひかはすほとに遠さかり、あやしき藪の中に二三人住けるとまやのはい入に両日雨にもり。

義弘らの旅は早立ちの船出であった。到着した蒲江（大分県南海部郡蒲江町）の渚に野狐を見た。野狐の鳴き声は旅宿にあった義弘をまんじりともさせなかった。旅の実感といえよう。蒲江のあたりは、大友・島津両氏の戦い（天正十四年）によって荒廃したというのである。戦いの余燼は未だ続き、寂寥たる有様であった。義弘らは、わびしい浦

の苦屋に雨のため出立できず二日間も籠ったという。戦いは人心ばかりでなく、全てに荒廃・惨害が残るのである。義弘は戦いの深い惨苦を味わったのである。「蒲江を八日卯之刻出船」して、未之刻「ほそくし」という所へ停泊したが、俄雨の天候となり、「たけのうら」へ船を入れ、御手洗玄蕃の家へ宿泊した。竹野浦（大分県南海部郡蒲江町）から「十日辰刻にをし出し」たが、一里ばかり行くと波風が荒くなり、再び竹野浦へ漕ぎ戻ってきたのである。御手洗の家に泊った義弘の随伴の一人、永純の詠歌が記されている。

二日は順風なくつれつれとこもり居侍る。所の名を題にて／永純／葉かくれにやとりやすらむすめかひ竹のうらこす浪にとひ来て／

永純は旅中十一首の歌を詠んだことが記されているのであるが、歌人永純については詳かでない。『上井覚兼日記』<sup>(7)</sup>に一ヶ所彼の名がみえる。即ち、「天正十四年正月十六日、御連哥也。御座躰、主居（義久）太守様、御次金吾（歳久）、喜入摂州（季久）、珠長（高城）、宗運（瀧間）、可丹（岩永）、客居武庫様（義弘）、御次川上上州（久隅）、秘書、忠棟（伊集院）、拙者（覚兼）、永純也。御連哥過候て、渋谷与吉、一王大夫参候、種々御酒宴共也」とある。月次連歌会の記録である。島津家・重臣・連歌師たちも加わっての連歌会のなかに永純もいたのである。残念なことに当連歌会の連歌は記されていない。

竹野浦を十三日辰之刻に舟出した義弘らは保土（大分県津久見市保戸）に着いた。細島に残してきた供の衆たちを迎え、旅の衆はにぎやかさを増したのである。保土崎は山や岩を動かすばかりの浪の荒いところで、「恐ろしかりし

事也」と記している。

翌十四日、潮時を待って豊後水道を渡り、たた崎（佐田岬）へ向かった。海水の流れの早い波間を渡り伊予「ふたまと」（愛媛県西宇和郡三崎町二名津・二間津とも書き「ふたまづ」ともいう）に着いたのは夜十時すぎのことであった。二間津で停泊した折りの永純の一首「／すすしくも風ふきとをすふた窓やにしにひかしに月をみるらん／」の詠歌がある。地名を詠み込み、月を見ながら舟上での仮寝の様子がうかがえる。旅情が詠出されていて興味ふかいものがある。

義弘らは、二間津より伊予灘を「やしろ嶋」（山口県大島郡屋代島）へ舟を進めている。永純は「／おほ海の神やつくりてすみぬらん波のうへなるやしる嶋をは／」と詠んでいる。「十五日未之刻に舟しゆか嶋と云る所にしほとき作りてやすらひける」とある。「ゆか島」は「由利島」（愛媛県温泉郡中島町）であろう。島の「矢たて神社」に旅の無事祈願して永純は「／あつさ弓いるよりはやく行ふねや矢たての神のめくみなるらん／」と詠んでいる。旅は不安であり、神の加護が何よりも救いになるという思いは、旅人誰しも抱くものである。

それより順風時の間に吹立て神のしるしを眼前に見侍りて、二神之嶋をとをるに、篠屋宗次郎かこ嶋打立之名残なといひ出

追風にのほりくたりの船のうへいのる祈りや二神の嶋と、よみ返しせよとせちにいひしかは、予船みちののほりくたりにおもふ人二神の嶋にいのりやすらん

永純

嶋々を明てみせけり玉くしけふた神の海の四方の浪間に

矢立の神の神助はにわか順風の船旅となった義弘らは、「二神の嶋」(愛媛県温泉郡中島町・宇佐八幡神社か)を眼前に見ながら詠歌となったのである。

篠屋宗次郎については、『上井寛兼日記』(下)に「渋谷松右衛門尉座衆」とみえる。義久のもとで演能が催された際、宗次郎の名がしばしば記されている。能楽師であった。

「二神嶋」の詠は、いずれも二神を船旅の無事安全のため、神助を祈願しているものといえよう。永純は「つわ嶋」(津和地島、愛媛県温泉郡中島町)で「舟に駒あらそいてこそいそくらめ乗をとすなりつわちの浦」と詠んでいる。潮流の速い瀬戸を通る際の実景であろう。

船旅は東を指して続けられ「蒲刈のせと」(蒲刈・広島県安芸郡蒲刈町)を通った。永純は「心なきあまなりけりな咲にほふ玉藻の花をかまかりにいて、義弘は「すすしくも南の風に棹さして猶みるふたをかまかりのあま」と詠んだのである。「自然に美しく咲き匂う玉藻の花を鎌で刈りとりとはなんと無情な海女たちよ」と地名「かまかり」による発想であろう。蒲刈の瀬戸を通る船上の詠は、快適な旅の表白である。義弘は「登りゆく塩に涼しき舟ち哉」の発句もある。文人義弘の一面がうかがえるのである。其の日は船上の泊りであった。

十六日は、安芸国の高崎(広島県竹原市高崎町)で一夜を明かした。「さてゆきゆきて田嶋と云る所をとるに、永純／海かけて植し田嶋の深みどり」と発句がある。田嶋は田島(広島県沼隈郡内海町)で、風光明媚な阿伏兎港(広島県沼隈郡沼隈町)の南西海上に位置していて瀬戸内航路上の要地であった。

十七日、「あふとの観音」を真近かに見ながら旅をつづけたのである。阿伏兎観音(臨濟宗磐台寺)は阿伏兎岬にあり九丈五尺の崖の上(観音岩)にそびえ立つ朱塗りの観音堂である。そのさまは威風堂々として壮観であり、航海

者たちは磐台寺の十一面観音と観音岩を併せて信仰していたと伝えられている。闇夜でも船の安全を導き荒天時にも波の穏やかなところである。永純の一首「／わくらはにとふ人あらは観音もみちくる塩にあふと答えよ／」がある。「備後のとも一見してやかて舟を出し夜に入りぬ」と備後の鞆（広島県福山市鞆町）を見物したのである。鞆は沼隈半島南端、南・東は燧灘に臨む天然の良港であった。古典文学ゆかりの深いところである。瀬戸内海上に仙酔島・弁天島・皇后島・玉津島など浮かぶ風光は、旅人たちの慰めであり、休息の地でもあった。

「十八日、巳之刻に讃岐の内塩飽嶋に至り、船頭助次郎所に宿」とある。鞆の浦から塩飽島（香川県丸亀市の沖合）まで一夜の船旅であった。その日は船頭の家泊まった。続いて十九日も亥刻に舟出して、やはり海上で夜を明したのち「うしまと」（牛窓・岡山県邑久郡牛窓町）の港に立ち寄ることなく、家嶋（兵庫県飾磨郡家嶋町）に着いた。家嶋は播磨灘に浮かぶ大小四十余の群島からなり、瀬戸内海航行する船舶の避難所的な要港であった。

岩を壁松を軒はにありふきてすすしかるらしあまの家嶋

永純

枕より跡より波やよせくらんあれぬ方なきあまの家嶋

義弘

住の江の松のあらしのすすしさやはちにかよふ沖つ白波

永純

の三首が記されている。義弘、永純ともに「あまの家嶋」と詠むのは、「家嶋」は、わが家が思い出され、自然のまに涼しい家といい、波の寄せくすることのない安住の家という。旅人の郷家への回帰が吐露されているといえよう。「住の江」の詠は歌名所・住之江（大阪市）と淡路島（兵庫県）を結び、松のあらしと沖つ白波の涼しさが伝わってくるような歌である。永純の詠む歌十一首は、平明で、地名をよみ込み、素直な表現であり、分り易い。永純の人柄

か。また、義弘三首も同様な思いがするのである。

「廿一日子之刻に兵庫嶋」(神戸市兵庫区、古代には大輪田泊、中世に兵庫島、近世には兵庫の津と称した)に着いた。深夜であった。「廿二日堺より伊勢雅宗入道来り遂熟談」とある。兵庫島に停泊していた義弘のもとへ尋ねて来た伊勢雅宗(不明)との熟談とは如何なものなのか。

「廿三日、夜をかけ堺之津へ着船、北之神明町経王寺と云る法花寺へ宿を定」とある。兵庫島より夜中に堺の津に着船した義弘は、北之神明町経王寺に寄宿したのである。旅の記の末尾には「又一郎<sup>(久保)</sup>へ遂見参、喜悦之躰可有推察候、恐々謹言」と記している。又一郎は義弘の長男久保である。父親と子供の対面は「喜悦之躰」と大変な喜びようは、なんとしても微笑しい限りである。義弘は日向飯野城より上坂の旅を二男又八郎(家久)へ書状としたのは「六月六日、義弘(花押)、又八郎殿」のことであった。

### 3

続いて追書の部である在坂の記を披見してみたい。義弘在坂の動静である。

廿四日(六月) 従太守様御文、伊地知右京亮御書持来、従御料人様も御文共在之、岡田官兵衛慰殿など書状にてとはれ候、

太守様は島津義久(第十六代)である。義久の書状と義久室からの書状を伊地知右京亮(重則、筑後守、義久納戸



役)が持参したというのである。岡田官兵衛は不明。「廿五日、太守様被御光儀、懸御目致安堵候」とある。義久は降服後、秀吉に伺候しようと上洛して数年間在京していた。義弘も兄義久の元気な姿に接して安堵したのである。明けて廿六日には「石田隠岐守殿より太守様御同前にめしふるまはれ候」とみえる。義久、義弘が石田三成より饗応に預ったのである。三成<sup>(9)</sup>は、豊臣氏五奉行の一人(治部少輔。正継の子、初名三也。通称左吉。若くして豊臣秀吉に仕え、天正十一年賤ヶ岳の戦に功あり、以後重用された。)であった。

義弘は廿七日にも石田三成・大谷吉継・木食上人(応其)を尋ねて馳走になっている。大谷吉継も秀吉の小姓・奉行として活躍、越前敦賀五万石を領有していた。木食上人<sup>(11)</sup>は、もと武士であったが、高野山で出家、興山寺に住した。全国を行脚して寺社の勧進につとめ、豊臣秀吉の根来寺攻略の際には和議をあっせんして秀吉の帰依を受け、高野山再興の援助を得た人物である。義弘は秀吉と謁見するために、秀吉の側近たちとしばしば交流親交していたのか。そのため動きのようにかがえるところである。

在京の義久とも連絡していた義弘は、遂に六月四日、大坂城で秀吉と謁見することになった。「湯漬御振舞相伴にて無之候」と記している。謁見の場には、幽斎・柴殿(秀次)・北郷摂州(北郷時久・日向荘内領主、都城領主)・深水宗方(三河守・相良忠房将)の人たちがいたという。謁見の座では寛いだ雰囲気であったようで、幸せな思いがしたといっている。秀吉も機嫌よく、鷹狩のことなど話があった。話の中、日向図田帳について、未だ秀吉のもとに届いていないとのことであった。義弘は早速、国元の上井覚兼へ申し付けたというのである。

「六月六日、関白様御茶湯、御座は山里と云り」と秀吉茶湯の会に招待された記事がみられる。亭主<sup>(12)</sup>(招待者)は秀吉、場所は大坂城内山里茶亭である。茶室は「三てうしき」(三畳敷)、時は「未明にめし出され候」とあり、朝会<sup>(13)</sup>(朝茶事)であった。義弘は当日の茶会の模様を次のように記している。

入口之かうし戸迄宗及被罷出、案内者候、たいすのかはりにて候、御食の御座、関様、武庫、幸侃、関様などの御めしなと御同座の儀珍敷由きこえ候

宗及は津田宗及である。<sup>(14)</sup>（堺納屋衆の一人で、屋号は天王寺屋といい、今井宗久、千利休とならんで織田信長、豊臣秀吉の茶頭を勤めた）。関白秀吉、武庫（義弘）、幸侃（伊集院忠棟）が同座した。

一会席之ぜんふ、本しる、<sup>(膳部)</sup>たうふわん、<sup>(豆腐)</sup>きりみやうかふし右之分也。<sup>(切茗荷)</sup>さい二つ手もとは焼物三切れ、<sup>(菜)</sup>ひたりはがんざういりさけを被入候、三しう一ふさ、<sup>(房)</sup>しろつけ一きれかなかけの中程にをかれ候、二のしるは鷹一しゆ、菓子<sup>(推茸)</sup>はしいたけ、<sup>(煮じめ)</sup>にじめ、<sup>(午考)</sup>ごぼう、<sup>(胡桃鮓)</sup>くるみあん、<sup>(盆)</sup>ほんはかうらいほん、<sup>(高麗盆)</sup>ぬりほん絵かきにて候。△△は私に記した。▽

まさしく茶会の会席（懷石）の記述である。義弘はかねてより茶道に堪能であり、千利休より伝受されたといわれている。如上の秀吉茶会の詳細な記録は、その熟達ぶりがうかがえるものがある。それは<sup>(15)</sup>一般的な茶事に従って、汁・飯・向附が出され、その後<sup>(煮物)</sup>に焼物が出、その間に銚子を出して酒をすすめ、飯を替え、香の物を出す。秀吉の茶会（会席）の初座が終り、客が茶室から途中で立つのである。中立である。客の中立役、亭主は座敷をあらため、床の間の掛物はずして、花を生け茶室の窓のすだれをとって用意をととのえるのである。

御茶のとき、(細川)幽齋被召也。手前(千利休)せむの宗易、(義弘)武庫は一服可被下之由、幽齋、幸侃、宗易はすい茶たるべきよし御錠候。

一茶入はぞろり、同盆はついくう。

一かまは紹翁(蘭)の秘蔵せしふうろく。

一天目はなやの宗及よりめし上られ候、しろ天目、同台は數の壺。

一茶入はにたり、大友宗麟よりめし上られ候由候。

同盆者ついしゆ。

一水さし名を失念候、南(蟹)はん物あかねの打物也。

一ひしゃく立はくるみ口。

一水こはしがうし天下一つ物と宗易いはれ候。従其薄茶二てう敷の御座にて被下候。手前は宗及。御道具。

一かまはうす口、あら木たうくん秘蔵せし由候、同ふたのとりて大きなうさきて候。

一水さし備前物、是もたうくん秘蔵せし由候。

一茶わんはこよみちゃわん、従其しようえん見物。

案内は幽齋、宗及にて拝見せられ候。結構きれいな事難延(述)短筆候。

ながながと引用したが、中立から後座までの丹念な記録である。初座のあと座敷等の用意がなされ、亭主(16)は鳴物(編)を打ち合図を送り、客は鳴物の音を鑑賞し再びにじり口より茶室に入る。床の間・炉・道具かざり荘を拝見し亭主の出を待つ。亭主は茶碗を持ち出し、濃茶を練るのである。一同濃茶を回し喫し、茶碗、使用された茶入、茶杓等を拝見して、茶

会是一段落するのである。義弘の記録する秀吉茶会の次第も、同様に終始していることがわかるのである。義弘の秀吉茶会の記録は、『南方録』<sup>(17)</sup>（「会」）。千利休のある年の一年分の茶会の抄録）の記事を披見し比べてみると、全く遜色のない見事なものであるといえるのである。天下人秀吉、文武の人幽斎、茶頭利休、宗及同座の茶会は、義弘にとっては名誉この上もない吉事であったといえよう。

4

「関様、御直談公家へ御なし給へく候」とあるのは、関白秀吉の推挙による叙位の動きである。「幽斎上洛にて武庫の公家支度馳走有へき由被仰、先々前支度たるへきよし候」となるのである。義弘を公家に列するよう幽斎の動きが記されている。『上井覚兼日記』<sup>(18)</sup>のうち「上井覚兼年譜」の「参考事項」によると、

天正十六年（一五八八）五月義弘上洛す。六月義弘従五位下侍従に叙任せらる。七月義弘に豊臣姓羽柴氏を授く。義弘従四位下に叙せらる。八月秀吉日向諸県郡の地を義弘に加増し、同郡都於郡の地を嗣子豊久に宛行ふ。

等々、叙任・名称・土地加増の記事をみると、当年における義弘の名誉の数々とその慶事が知られるのである。義弘<sup>(19)</sup>はのちに正四位下に叙せられ、慶長四年（一五九九）参議に任ぜられ、同年出家し惟新を号したのである。（なお、明治になって贈三位の栄誉を受けている）。

大坂城内山里亭茶会の後、義弘は大坂にて二百穀、京都にて粮物等の拝領があった。在洛中の兄義久、子息又一郎

について「御いとまの儀、兎角未聞候、猶々追々御吉左右可申、此由宰相へも可被仰聞候、又いつれも心得たのみ入候。」と記している。『義弘書状』の末文である。秀吉の九州平定による島津家当主義久の立場は複雑なものがあつた。秀吉への恭順の態度（人質として在洛）は、何時解決されるのかわからない状況であつた。義弘は此の度の上坂の機会に是非兄義久の帰国実現を望んでいたものようである。

さきの『上井覚兼日記』<sup>(20)</sup>「上井覚兼年譜」の「参考事項」には、天正十六年（一五八八）「秀吉、義久をして琉球の入貢を促さしむ」「九月義久大坂を発し、帰国す」とある。翌十七年「正月秀吉方廣寺大佛殿建立の材木を義久に徴し、又琉球王尚寧の使者を伴ひて上京す」。十一月、秀吉義久の久保への家督相続を許す」と記されている。即ち、義久の薩摩への帰国は、琉球への対策という秀吉の考えによるものであるのか分らないが、兎も角義久は無事帰国が叶つたのである。義弘の帰国は十七年八月であつた。それより先、六月十二日、上井覚兼は伊集院に於て病没している。四十五歳であつた。なお、義弘<sup>(21)</sup>は元和五年（一六一九）七月二十一日「春秋の花も紅葉もとどまらず人も空しき関路なりけり」の辞世を残して八十五歳の生涯を終つた。

島津義弘の旅の記は、前半部上坂の旅、後半部（追書）は在坂中の動向の二部に分けて読むことができるのである。文武の人義弘が子息又八郎（家久・第十八代）へという書翰であるが、旅の実際の種々相を始め、天下人秀吉との茶会の模様詳述など、語り掛けているようなところもある。文章も簡潔平明である。

(注)

- (1) 三木靖編『島津義弘のすべて』所収・滝口康彦「義弘の出自」(新人物往来社) 平成四年七月刊
- (2) 九州史料刊行会編『近世初頭・九州紀行記集』所収「島津義弘書状」(大隅加治木島津家文書) 昭和四十二年九月刊
- (3) 注(1) 同書 島津修久「義弘の武功」。紙屋敦之「義弘の年表」。
- (4) 注1 同書 紙屋敦之「義弘の年表」。
- (5) 拙稿『新納忠元上洛日記について』立正大学人文科学研究年報第二十四号所収 昭和六十一年三月刊
- (6) 注(4) 同書
- (7) 東京大学史料編纂所編『上井覚兼日記』(下) 八六頁。岩波書店 昭和三十二年六月刊
- (8) 注(7) 同書 (下) 四九頁 一八四頁 一八五頁。
- (9) 高柳光寿・竹内理三編『角川日本史辞典』角川書店、昭和四十七年一月刊
- (10) 注(9) 同書
- (11) 注(9) 同書
- (12) 西山松之助校注『南方録』補注三一六頁〈中立〉岩波文庫「青二七―二」昭和六十一年五月刊
- (13) 注(12) 同書 補注三一七頁〈朝会・昼会・夜会〉
- (14) 注(12) 同書 四七頁〈宗及〉
- (15) 注(12) 同書 補注三一六頁〈中立〉
- (16) 注(12) 同書 補注三一六頁〈中立〉
- (17) 注(12) 同書 二八頁〜五七頁「会」―宗易茶湯日記―
- (18) 注(7) 同書 (下) 二三八頁
- (19) 注(1) 同書 三木靖「義弘の家族と生涯」
- (20) 注(7) 同書 (下) 二三八頁
- (21) 注(1) 同書 三木靖「義弘の家族と生涯」

○地名については『角川日本地名大辞典』(角川書店) によった。